

# 小田原史談

第13号 談会  
小田原史談会  
小田原市幸一丁目  
小田原市文庫  
小田原市郷土

## 郷土の学者

### 中垣謙斉を偲ぶ(一)

蓑田長平

小田原出身の相当の年輩の人で、明治維新時の学者中垣謙斉秀実の功績を知らぬ方はなからうと思う。謙

して悲惨の様相を呈したところであろう。それを思うと戦慄を禁じ得ないものがある。

#### 謙斉の略歴

翁逝いて本年は八十六周年、その偉大な功績も、年を経るに従い世人の記憶より遠ざかり、殊に歴史を教える終戦後の教育は、全然その事績を知らざる青年の多きを遺憾として、ここに筆を執った。尤も当時の情勢については、明治維新史と深きつながりを持ち、広汎に亘るので、私は単に当時大久保藩の向背と事績の概要について述べて見たいと思うのである。

本名は中垣秀実、謙斉と号し幼名は吉之介、のちに欣吾・求馬・斉宮・秀実と改めている。文化二年五月二十九日小田原城下通称天王横町(今の十字三丁目)に生れ、文政四年二月父甚五左衛門死亡に付同年四月に跡を継いだ。謙高百石の小身の方である。十七歳中小田原集館助教を仰付年々一兩二歩の手当を給せられた。

集館は人材養成のため、名君の誉れ高い忠貞侯

の開いたもので、文武館又は稽古所とも称せられた。現在の文武館はその旧跡の一部に建てられたものである。謙斉は在職二年にして罷め、文政七年七月藩主の世子敬順のお附となって江戸に出で、天保二年十一月敬順二十二歳にして逝去せられてお後ご免となり、小田原に帰り爾来御先簡頭・御目附役・川村閣所(山北(矢倉沢(足柄町)監督・大目附役等を経て固老に従い藩兵の監察として二回も京都に出張した。

書記官巖谷修の岡先生で何れも有名な学者及び書家であり、当時謙斉の名は相当世に知られていたものと思われるのである。謙斉は容貌魁偉で眉秀で長髯雪の如く垂れ、自然に備わる偉傑の相があった。経文に精通し、詩文にたくみで、劇職にあっても一日も書巻を離さなかった。謙斉の師は明らかでなく或は幼より勉学に志し独学よく大をなしたと思われるのである。今日残る多くの謙斉の詩文には他の追従を許さない名作が少なくなくその人と為りが偲ばれるのである。

一、四月九日大総督府参謀より藩主に対し「房総屯集の賊徒打洩したる残兵相州浦賀又は伊豆辺、渡海、鎌倉箱根諸所へ變來の聞えあるを以て油断なく残賊相見え次第早々取り、猶此上忠勤を抽んずべき旨」の御沙汰書。

めた功績は永く史蹟に残し子孫に伝うべきものであるもし当時翁が居なかったならば大久保藩は逆徒に組みし、箱根の嶮を待み、小田原城に廻って官軍に抗じ、其の結果は想像するまでもなく、順逆を誤った罪科重く、藩王以下多くの家臣の制裁は勿論、戦後の市内は民家は焼かれ一面荒廃に帰

以上が経歴の概要である謙斉の石碑が大久保神社城内に建てられている。明治十一年二月の建設で元善提寺の大久保寺にあったのを同十五年九月菅原神社境内に移し、同二十九年七月現在の地に移されたものである。碑の題額は旧藩主大久保忠礼侯、撰文は一等編修官川田剛、書は太政官大

時は慶応四年二月徳川慶喜は江戸城を出でて上野寛永寺に引籠り、恭順謹慎の誠意を示したが、藩臣及び会澤その他朝命に従わない諸藩があり征討として有栖川敬仁親王東征大総督となり、東海・東山・北陸の三方より進軍、大総督は既に駿府城に駐在して、小田原藩主大久保忠礼侯に数々朝命が下り、藩はこれに対し相当の処置を執り従順の実を挙げて居る。主なるものを列記すれば

一、二月八日「御親征につき国力相応の人数差出すべし」との朝命。

一、二月二十七日藤枝信に於て先鋒総督の命を奉じて家老加藤直衛の名義を以て「今般御親征につき謹んで奉遵朝命に出精忠勤を励み藩中決して二心なき旨」の御清書提出。

一、二月二十七日東海道三島宿より藤沢宿まで沿道の兵糧並に駅通について朝命。

集館は人材養成のため、名君の誉れ高い忠貞侯

一、四月十一日大総督有栖川宮、小田原城下に御一泊につき、忠礼侯本営へ伺候、天機奉伺且つ出兵等のことにつき指揮を仰いた。(続く)

集館は人材養成のため、名君の誉れ高い忠貞侯

集館は人材養成のため、名君の誉れ高い忠貞侯

集館は人材養成のため、名君の誉れ高い忠貞侯

集館は人材養成のため、名君の誉れ高い忠貞侯

# 無題

古屋安定

一世に名を成すと大したもので、縁もゆかりもないところに、思いがけない人のお墓があったりする。二宮尊徳の弟三郎左衛門の家

に、尊徳の遺髪がたくさん所蔵されていたのが、来訪者から強要されるまゝに分与して、今では残り渺なく甚だ心細さが感ぜられる程である。貰って行く時は、俤人の分身として珍重し敬慕して、家宝として祭祀すると云って帰るが、その殆どはその後音沙汰がないようであるが、一部は確かに祭祀され、供養をされて、家訓としてその遺徳を後代に伝えられていることは事実であろう。それが、時に「二宮先生はこちらに來られたことがあるだろうか」とか、「先生は此処に見えてこんなことをされた」とか云うことになり、やがて公然と遺跡として顕彰されるようなこともあり得るのである。それが果して遺跡か偉業の宣揚か、敬慕の表象か？後世の好事家をして

迷わせることになるのである。―― 栢山の善栄寺に、尊徳の墓がある。これも尊徳の遺髪・遺髪を葬ったのだと云うが、その後墓地の移動は多少あったとしても、これを尊徳の遺跡の一つとして挙げることに、これは何人も異議のないところである。 私は戦時中、二宮三郎氏の厚意を得て、尊徳の遺髪に分与を受け、当時の校長米山要助氏と協議の上、校庭に之を祭り、細やかな二宮神社が建立されたのであるが、戦後、情況の変化に伴って、これを取り除くことになった。社会状況が変ったからとて、自分の思想にそう変化があるわけなし、三郎氏との約束もあり氏の了解のもとに、私は密かにこれを自宅に移して、現在に至っている。 こうして占領政策の眼は逃れたものの、身不肖、恐懼に堪ぬものがあり、何とかして、早く世に復活さ

せる機会の到来を待っていたのであるが、誕生地に尊徳の生家も歸っている時、実は好機到来を喜んでいたのである。

古い話であるが、かつて栢山に二宮神社建立の運動があったようであるが、これは遂に実現しなかった。報徳記念館が出来た時、これを講堂なり、宿泊所のことかにも祀れたらと思ったこともある。けれども御時世に逆行するのだから、誰もこれに関心を示さなかったところ、今は既に生家も復元されて、原地に歸っている。これは尊徳が出生以來、一家離散までの、苦難な生活の中から、彼の成長

## 隨筆あれこれ

### 会社乗取り騒動の巻(二)

井上生

とうとう自分も犠牲になるからと言う事を前提としてそれぞれの方々に因我を含めさせたと言う次第。然し一番困った事は親父と共に創立には大変御尽力を頂いた渋沢子爵其の名代である小林常務に対して話しをす

して行った行績を、追慕願うのは、私にとって甚だ忍びないことである。たまたま尊徳自作の詞(お札など納めておくもの)が現存している。若しこれに納めて生家の床の間にでも安置出来たら、どんなに幸せなことだろうと、私はそんな考えを抱いて来ているのである。――もともと、尊徳自作の祠は現在二宮神社の宝物になつていたので、今これを動かすことは恐らく不可能であろう。だからこうした線で工夫したら何か適切な良案が生れて来るのではないだろうかと思うのである (終)

も洩らさじとジーと聞き入った。小林常務は段々と音声も小さくなりいかにも残念そうに！そして最後には「これも仕方ない」立派な応接部屋に三人しんみりとなが居るやら居ないやら大声で僕を呼ぶ、びっくりした夫妻は私の顔を見つめる。「小林さん！僕が敵を取って上げましょう。何だ！馬鹿な馬越め、今迄の事を伺っていると彼はすじが通らない。金慾ばかりでは世間が通らない。社会は義理人情で持っているんだ法を擁護して勇取ろうよ、でもそうはいかないぞ。重役さん！私はいかに今に見ろ、きつと敵を取らなければ私の信念が承知しない」と自分自身興奮して私は御夫妻に対して頭を下げた。すると「井上君！君の同情は有り難いけれど敵を取るなんて」と心配そうに私の顔を見られる。

実は私が剣道が出来るのを良く知っておられるので、日本刀でも持って馬越邸に乗り込む積りかも知れぬと思われたかも知れぬ。私はそれと察して「いゝえ決して乱棒は致しません。仮り

る事が出来なかった。丁度其の頃、子爵は病床の身病弱であったのが社長として話し出すのに都合であったかも知れない。とくと右の事情をお話した。「小林の意志に従おう」と言われたので社長も安心したそうである。その様に無理矢理に会社は馬越氏に乗取られるはめとなったそして彼の発案で緊急臨時株主総会を開く通知状が送られてあと一週間後にせまったと言う事なのである私は小林さんの言葉を一言

に面会を申し込んだ処で会ってほぐれないでしよう。そんなやぼな事はしませんから御安心下さい」と言っただが、どんな方法でやるのかは未だ考えもつかない。

これはなんでも少々冷静に考えた方が宜敷かるうと思つたので、深夜小林邸を辞して歸路についた。

扱て歸宅してよく考えても好案は浮びそうもない。然し昨夜あの様な公言をはいたのであるからには何とかしなければならぬだろう

面通問題ともなつた二、三日は会社へ行つていても其の事ばかりか頭裏にこびり附いていんうつな事おびたらしい。誰にも相談は出来ない、困りきつていとフト心に浮んだのはいやしくも話の相手は一流実業家ばかり、其の大物を動かすのは一体何だろうか？

そのうだ政党だろう、然しどの政党が良いか。

当時は政友会と憲政会とがあつて、内閣は田中義一内閣時代、内務大臣は鈴木喜三郎、大蔵大臣は高橋是清書記官長鳩山一郎と言つたいわば政友会が天下を握つていた。其の幹事長に森恪

氏があつた。新聞や人々の話を綜合すれば森恪という人は実に偉大な政治家と聞かされている。何でもイ

エス、ノーは速座に決めて一端口に出した以上必ず其の通り実行して呉れると言

う事だ。よし！偽か誠か一つ當て見よう。けれど未だ一度も御目に掛つた事もない無論話すら交つた事もないので、思案に暮れて

いると不思議なもので、心の底から勇氣が溢き出て一か八か実行に移す可しと励まされている様な心持になつた。

時は昭和二年八月の盛夏と記憶する。購買と倉庫の兼任の用度課長となつた私は机上の電話器を取り上げて政友会本部へと電話したのであつた。

「モシモシ政友会本部ですか？森先生が御居居でしたらすみませんが電話口へ御願ひしたいのですが」する

と男の声で「あなたはどなたでしようか？」

「私は帝國ホテルに勤務している井上英一と申しませう」

「いゝえ一度も御目に掛つた事はありません」

「そうですか、それでは何の御用件ですか？」

「要件は面会の折御話し申し度いのです」

「先生は只今忙がしいので電話口へは御出になられません」とガチャンと電話を切つた。

憤慨した私は亦電話すると先の秘書らしい男の声が出る。

「おい、君は不礼ではないか？先生に取りついで下さい。天下の一大事だからつなげ」と当方も頑張つてねばつた。しばらく待つほどに「おい何だ？」と幅の広い

い音声の流れて来て「君は誰だね？」

「私はホテルに勤めています。一事務員で井上と申しませうが、実はホテルの事で是非先生に御拝顔を申したいので御座居ます。天下の一大事ですから曲げて御許し下さい」

「何！天下の一大事だと、よし直ぐ来給へ会おう」と言う調子で面会する事となつた。(續く)

### 電気灯

(小田原昔話より)

小田原で官民懇親会を備す事になり、会場は小伊勢屋旅館に決定した。其処で余

興には何をやるかというので、主催者側が頭をひねつた。すると一坐していた二

見助右衛門が「どうだ諸君文明開化の光を最もよく表現する上から、今度の余興は一つ、電気灯というものを点けて見せようではないか」と提唱した。一同は此

の奇想天外な着想に「君頗る妙也。果せる哉又絶妙也」など、半可通の漢語をまぜたりして嬉れしがつた

計事は密れるを以て貴しとなすで、早速東京から横浜からか、其処迄は、はつきりしないが兎に角、技師をよんで来て工事にかなり

なれば、懇親会の列席者であるなしにかゝらず、附近一円は黒山の見物で、動きはとれず、夕景からは入出を当込んだ駄菓子屋が屋台をならべ、お祭り以上のさわぎである。この特の状況を相洋もしほ草という写

### 報徳祭行事御案内

本年も報徳祭に参列御希望の方は左記により御申し出下さい。史談会の会員以外の方の歓迎いたします。

一、日程(九月十九日前夜祭後ここに宿泊) 集合 九月十九日(水)午後五時報徳記念館に集合

○前夜祭 五時三十分夕食、六時三十分より講演、講師は文学博士佐々井信太郎先生

九月二十日(木)午前七時半朝食、十一時迄に史跡見学その他、十一時善栄寺で法要に参列

正午記念館にて昼食(尊徳にぎりめし) 午後一時尊徳生家にて茶の湯に参列 後解散

二、申込 会費四百五十円前納 郷土文化館内事務局へ

○バス小田原駅前栢山行四時丁度小田原は富水で下車十九日の聴講はどなたでも十九日午後一時より謡二宮二十日午後一時より演芸。

### 印刷物は

弘英印刷へ

小田原市井細田八一 電話四、一〇八番

第十三号

昭和三七八年八月十五日発行 (毎月一回発行)

会費 一ヶ月三百六十円 発行人 小田原史談会

編集人 機関紙編集部 右衛門は、克角の評のあつた人であるが、電気灯を余興に点けて見せた所など、かなかの文化人である。

発行人 小田原史談会 編集人 機関紙編集部 右衛門は、克角の評のあつた人であるが、電気灯を余興に点けて見せた所など、かなかの文化人である。

発行人 小田原史談会 編集人 機関紙編集部 右衛門は、克角の評のあつた人であるが、電気灯を余興に点けて見せた所など、かなかの文化人である。

<p>電話(〇四六五)二四四九番 小田原市十字三 平野商会 <b>平野久雄</b></p>	<p>写真 <b>イガラシ</b> 小田原市幸3 TEL2534番</p>	<p>趣味の陶器 <b>江島屋</b> 小田原箱根口 電話6602</p>	<p><b>竈志澤</b> TEL3131</p>
---	---	---	-------------------------------

<p>株式会社 <b>小田原百貨店</b> 社長 神戸英次郎</p>	<p>明るい生活 楽しい読書 <b>八小堂</b> 小田原駅前 TEL5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 株式会社 代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社 <b>大雄山線</b> 運営事務所</p>
--	---	---	---

<p>あなたの洋品店 <b>はふや</b> 小田原幸町 TEL2307</p>	<p><b>小田原信用金庫</b></p>	<p><b>きそば庵</b> 小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p><b>松坂屋製菓本舗</b> 小田原市十字二 電話五二七六番</p>
---	-----------------------	--	---

<p>高級陶器の店 小田原市緑1~103 小田原銀座通り 株式会社<b>江島屋陶舗</b> TEL(0465)5427</p>	<p>甘露梅 月の衣 小田原駅前 <b>正栄堂菓子舗</b> 電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店 <b>花田屋</b> 小田原銀座2 電話3788番</p>	<p>カメラ・写真用品 なんでも揃う <b>カメラの光輝堂</b> 小田原駅前 TEL5965 4859</p>
---	---	---	--

<p>東海化成株式会社 取締役社長 滝本及信 成型加工 プラスチック 電話小田原五九二七番</p>	<p>資生堂ホールセール(特契店) ベルマン、パピリオドール、マ ナー、キャロン婦人靴下代理店 有 限 会 社 <b>山一商店</b> 小田原市井細田428 電話3553</p>	<p>建築金物 家庭金物 株式会社<b>星崎仲吉商店</b> 小田原市多古412番地 電話2718</p>	<p>畳表・日用品 問屋 <b>茶利商店</b> 小田原市多古25 電話2341・2374</p>
---	---	---	---

<p>御料理仕出し 御弁当 株式会社<b>東華軒</b> 代表取締役 飯沼相三郎 小田原駅前 TEL(0465)5061~2</p>	<p>純良医薬品 株式会社<b>オタワラ薬局</b> 錦通り電三、〇四八</p>	<p>化粧品 おしゃれ彩華 <b>松屋</b> 小田原錦通り 電話三三三三六</p>	<p>銘菓 銘菓 千代菊 銘菓 甘露梅 銘菓(県指定の店) 電話2376 <b>集栄堂本店</b></p>
--	--	--	---